1.　「南イタリア中世壁画群診断調査プロジェクト」予備調査の結果報告

(1)　平成 22 年 9 月に 2 回の予備調査を実施

第 1 回目：南イタリアのプーリア州を中心に国立フィレンツェ修復研究所所長、壁画部長、修復士、モリーゼ大学の研究者、現地の市文化担当者とグラビーナ・イン・プーリアを中心に予備調査を実施した。

第 2 回目：プーリア州文化財監督局長のファブリーツィオ・ボーナ氏等が同行し、本プロジェクトで調査する対象壁画を選定するため、プーリア州各地から希望のあった対象壁画を約 20 か所調査した。

(2)第 1 回（平成 23 年 9 月）調査地の決定

予備調査をもとに同修復研究所と協議の結果、平成 23 年度からイタリア側研究チームと本学が共同して本格的調査を開始する地域は、プーリア州「グラビーナ・イン・プーリア」及び南端の「ポッジャルド」（ヴァステ）の 2 か所に決定した。

調査対象 No.1：San Vito Vecchio　Gravina in Puglia

凝灰岩台地をトンネル状に掘削した教会で、堂内には 13 世紀から 14 世紀初めにかけて描かれた壁画がよく保存されている。1958 年にローマ中央修復研究所によってマッセッロ法（ブロック移動）でポマルチ博物館内に移築された。

調査対象 No.2：　Cripta dei SS.Stefani　Poggiardo (Vaste)

「サンティッシミ・ステファニ礼拝堂」　ポッジャルド（ヴァステ）

10 世紀から 14 世紀にかけて描かれた壁画のある礼拝堂(Cripta)で、17 世紀まで使用されたが、その後は荒廃し、農地の中にとりのこされた。

(3) 平成 24 年度以降の調査地の選定

平成 23 年度以降の調査地の選定は、プーリア州以外のバジリカータ、カラブリア、カンパーニア各州の予備調査を 23 年 1 月に実施した上で、調査対象壁画を決定する。

2.　壁画実習（2010.11.19～24）

「日伊教育研究連携事業」として、フレスコ壁画研究センターは国立フィレンツェ修復研究所のマリアローザ・ランフランキ主任修復士を本学に招へいし、人間社会学域人文学類フィールド文化学及び学校教育学類美術教育、理工学域環境デザイン学系学生等を対象に講義及び学生実習指導を行っている。

イタリアでは 1980 年代以降、できるだけ壁画を建造物から剥がさない方向での修復と保存を実施しているが、地震災害など、やむを得ないと判断した場合には、壁画を建造物から剥がして、博物館や美術館に保存・保管する。しかし、実施例が少なくなったとはいえ、壁画保存の最終手段としての「剥がしの技法」はもっとも高度な技術と多くの経験を有する、病んで傷ついた壁画に対する重要な治療法であることに変わりない。

今回の実習の目的：フレスコ壁画の剥がし技法である 2 種のストラッポ法とスタッコ法の違いによって、壁画描画層はどこまで忠実に保存できるかを実験する。

①絵画担当の大村雅章教授が『聖十字架物語』（サンタ・クローチェ教会大礼拝堂）の一部を、これまでの材料・技法研究を活かして、原寸大で忠実に 3 点同時に模写。3 点を同時に制作するのは、2 種の剥がし技法を比較するためで、これらの内一点は剥がさずに壁面に残す。サンプル壁画の中にはフレスコ技法だけではなく、接着剤（卵黄）を用いたセッコ法部分、密蝋と金箔による金彩装飾（彫刻担当の江藤望准教授）が施され、壁面から剥がされて別のパネルに張り替えられたときに、どこまで損傷を受けるかも調べる。

②2 種の剥がし技法：
(A)ストラッポ法　(strappo)：最上層の描画面のみを薄く引き剥がす技法。
(B)スタッコ法（stacco)：下塗り漆喰（アッリッチョ）と上塗り漆喰（イントーナコ）の層間で剥がす技法。

原寸大で忠実に 3 点を同時に模写

完成した模写

実習指導にあたるマリアローザ

実習風景